



旧閑谷学校 (岡山県)

素材研究
(国内)



「山水清閑」と池田光政が称賛した環境は
今も変わりません



講堂の床に正座して「論語」を学ぶ姿は、
旧閑谷学校の伝統です。



儒学の祖・孔子の徳を称える最も重要な施設である聖廟



秋にはライトアップされた紅葉も楽しめます



旧閑谷学校を代表する国宝「講堂」の内部。凛とした雰囲気、思わず背筋が伸びる空間です

日本遺産ダブル認定の旧閑谷学校 地域観光振興でもその求心力に期待

岡山県備前市にある旧閑谷学校は、2015年度に「近世日本の教育遺産群」学ぶ心・礼節の本源」として日本遺産に認定されたのに続き、2017年度に認定された「き」と恋する六古窯〜日本生まれ日本育ちのやきもの産地〜でも「備前焼」の構成文化財に名前を連ねました。同市では、体験型・学習型の観光へとシフトしていく上でも、旧閑谷学校を重要な観光資源と位置付けています。

日本で初めての「庶民のための学校」

旧閑谷学校は江戸時代前期の寛文10年（1670年）に、岡山藩主池田光政が日本初の「庶民のための学校」として創建したものです。

この地を初めて訪れた池田光政は、「山水清閑、宜しく読書講学すべき地」と称賛し、学校の設立を決めたと伝えられています。この藩主の意を受けた家臣の津田永忠が約30年の歳月をかけて、元禄14年（1701年）に現在とほぼ同様の外観を持つ堅固で壮麗な講堂を完成させました。国宝の講堂や聖廟など主要な建物だけで約5万枚もの備前焼の瓦が使われています。

公益財団法人特別史跡旧閑谷学校顕

彰保存会では、「学ぶ心・礼節を重んじた近世の教育が近代化の原動力となり、現代にも受け継がれていることが認められたもの」と日本遺産認定を評価する一方、「従来の保全・保護に加えて、地元の活性化にもつながる地域資源として積極的に活用してもらいたい」と方針です。

日帰り・通過型から体験・学習型へ

備前観光協会でも、旧閑谷学校の日本遺産認定を受けて、これまで来訪者を中心に行ってきた案内に加え、地域外への積極的な情報発信の強化も推進。

岡山市備前市保存会との連携を図りながら、地域の貴重な観光資源として大きな潜在力を持つ旧閑谷学校を軸に、日帰り・通過型の観光が主流となっている観光形態から、日本遺産のストーリーに基づき周遊型や体験型・学習型の観光形態のプロジェクトを進めていく考えを明らかにしています。

旧閑谷学校では、紅葉の時期に敷地内のライトアップを開始しているほか、今年度からはクラシックコンサートなどのイベント開催も検討するなど、旅行者誘致に資する展開も進められる見通しです。

「庶民教育の殿堂」として340年以上にわたり形を変えることなく存在し続けてきた旧閑谷学校は、その求心力を地域観光振興でも発揮することが期待されています。